

# 「総合的な学習」のなかの金融教育

～「他人事」ではなく「自分事」として取り組むことで育つ「生きる力」～

## 金融教育の現場レポート

「金融教育」は、お金や金融のさまざまなのはたらきを理解し、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。この「コーナー」では、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。

今回は、現在は小学校教員養成に携わる武庫川女子大学専任講師の藤本勇二先生が、前任の徳島県阿波市立市場小学校で実践されていた金融教育の取り組みについてご紹介します。

藤本先生は、子どもたちが切実感をもって自分自身のこと（先生はこれを「自分事」と表現します）として取り組むことの重要性を説いています。

### 「金融教育」は総合的な学習の切り口のひとつ

「児童自らが資金を調達して科学の祭典を開く」。藤本先生は前任の徳島県阿波市立市場小学校の6年生の年間カリキュラムで、この取り組みを何度も成功させてきました。

「科学の祭典」という一大イベントを軸に、その実験材料費等の資金は、「国会」に見立てた学年集会を開いて、空き缶、古紙、段ボールの回収や授業参観日のバザーによって集めることを決議。バザー省、古紙回収省、アルミ缶リサイクル省を設

立し、それぞれに大臣、副大臣、事務次官を置いて自主的に運営させます。各省からは算数の得意な子どもを財務省に「出向」させ、実際に銀行口座を開設して資金管理にも携わらせるといふ本格的な内容です。

資金調達を中心とした金融教育だけでなく、科学の祭典「理科、リサイクル」総合的な学習、国会運営「社会科、実験解説書の発行」「国語」など、各教科の学習にもつながっており、本当によく練られたカリキュラムになっています。

### 「切実感」と「自分事」が子どもを育てる

そもそも、どうすれば児童を動かす大きな取り組みが可能になるのか。

藤本先生は、子どもへの願いや問いから

#### ■「科学の祭典をしよう27時間」カリキュラムイメージ

- ① 「どんな学校にしたいか」のワークショップ [1時間]
- ② 「科学の祭典」の夢を語る [2時間]
- ③ 資金調達のアイデアを出し合う [1時間]
- ④ 実験テーマの決定 [2時間]
- ⑤ 資金調達を行い、「国会」で報告し合う [6時間]
- ⑥ 担当実験の練習、パンフレット作成などを行う [8時間]
- ⑦ 「科学の祭典」を行う [5時間]
- ⑧ 自分たちの活動を振り返る [2時間]



兵庫県  
武庫川女子大学  
専任講師 藤本勇二先生



資金調達などについて自分たちで話し合う場を“国会”と呼ぶ



アルミ缶、スチール缶、プラタブの回収を月一回行う



“財務省”は銀行で通帳を作り資金管理する



発する「切実感」、そして、子どもたちにとって学びが「過性のイベント」や「他人事」ではなく生活に密着した『自分事』になることが重要だと指摘します。

子どもたちの視線は社会にも向き、生活で目にするものをよく観察し始めます。「国会」での予算獲得は真剣勝負ですよ。「科学の祭典で使う電池代が高い。学校の充電式電池は使えないのか？」というテーマで、出前授業に訪れたパティシエの力を借りながら、10歳の子どもたちが自分たちで「ほうれん草の蒸しケーキ」を考案するに至ります。

リサイクル活動に参加して金銭の価値や労働の意味を実感した児童たちは、次に自分たちが稼いだ資金を運用し実際に使う場面になると、1円の価値と計画的な使い途を真剣に考え出します。そして、子どもたちの視線は

「リサイクル活動に参加して金銭の価値や労働の意味を実感した児童たちは、次に自分たちが稼いだ資金を運用し実際に使う場面になると、1円の価値と計画的な使い途を真剣に考え出します。そして、子どもたちの視線は



**子どもたちの力が保護者や教師を変える原動力に**

藤本先生のカリキュラムでは、リサイクルも科学の祭典も、運営の主体は子どもたちです。アルミ缶や古紙回収には保護者や教師も参加しますが、実は見守っていることの方が多く、大変そうな時に手助けする程度だそうです。

「通常、リサイクル活動といえは、作業する大人たちの手伝いをする子どもたち、ということが多いのですが、『自分事』として現場に関わっている子どもたちは違います。すべては自分たちの事なので、自分でやるうとするんですね。そんな子どもたちの姿を見て、教師や保護者はその成長に目を見張り、心動かされる

ものなんですよ」

実際、この授業を始めてから、6年生のアルミ缶回収活動が学校の委員会活動へと「昇格」。その活動をベースに、同校は学校版環境ISOの指定を受けるまでに発展していきます。

**「先生を育てる」  
これからの使命**

さて、藤本先生は2010年度より、26年間過ごした小学校の教育現場を離れ、神戸の武庫川女子大学で将来の小学校教諭を養成する立場で活躍中です。

実は藤本先生が実践してきた「生活教育」の分野は、カリキュラム、指導法ともに大学の教員養成の段階でエキスパートがほとんどいない

**資金調達の成果  
「科学の祭典」**



アルコールが気化する力で紙コップを飛ばす



下級生に大人気のスライム



「電流イライラ棒」は回路の学習



「音遊び」は身近な材料を活用



オレンジの汁で風船割り



のが現状。

「現場の空気が分かる大学教員が求められている今、次代を担う教員養成に携わりたい」と藤本先生は意気込みを語ります。

金融教育をはじめ、環境教育、キャリア教育などで掲げられる教育目標は最初の切り口に過ぎず、子どもにとって切実感のある『自分事』の実践を行えば、結果としてさまざまな教育の成果が手にできると、藤本先生は強調します。

「教育界では、全国で優秀な教育実践例が発表されても、他の先生からは『うちにはそんな環境は整っていないから』と『他人事』にされがちな傾向があるのも事実です。でも私の経験からすると、四国一の清流や棚田などの豊かな自然環境を利用した実践教育を行ったこともあれば、都会の小学校では、リサイクル、科学の祭典、ボランティア活動などを行ったこともあります。このほか、地域のお祭りなど、あらゆる素材が地域ごとにあるものです。他の先生のシナリオを借りて、素材を少しアレンジすれば実践可能な授

業はまだまだあると思います」と藤本先生は語ります。

どこへ巣立って行っても、子どもたちを『自分事』にさせる授業ができる教員を一人でも多く育てていきたいという藤本先生。今は大学教員として、新たなステージに挑戦しています。

「科学の祭典」などの活動が終わった後も学校全体として取り組むことになった「学校版環境ISO」。合言葉は「楽しんで学ぶEスクール」。その行動指標をビンゴゲームという工夫で目的達成を促進する

ゴミの分別 はきちんと しています	段ボールを 出す場所を 知っています	エコペーパー ボックスを 利用しています	落ちてい るゴミを 拾います
自分のもの には名前を 書きます	ノートを やぶりません	電気を つけっぱなし にしません	アルミ缶を 出す場所を 知っています
ノートは さいごのページ まで使います	水が出しっ ぱなしだったら 止めます	「Eスクール いちば」を 知っています	そうじには バケツを 使っています
消しゴムは たいせつに 使います	えんぴつは みじかくなる まで使います	なくしたものは 探します	歯をみがく ときには コップを 使います

「Eスクールいちば」ビンゴゲーム

## 金融教育の現場レポート

### 「総合的な学習」のなかの金融教育

～「他人事」ではなく「自分事」として取り組むことで育つ「生きる力」～

兵庫県

武庫川女子大学専任講師 藤本勇二先生